

薬を中止し1ヶ月後、潰瘍はすべて癒痕化していた。

26) 直腸狭窄を伴った後腹膜線維症の1例

井ノ口幹人・福成 博幸
井石 秀明・数井 晶 (県立十日町病院)
大川 卓也 (外科)

後腹膜線維症は大動脈周囲に起こる線維性増殖で、尿管狭窄を起こし、泌尿器科で扱われることの多い疾患である。今回我々は直腸の狭窄を伴った、まれな症例を経験したので報告する。症例は64歳、男性。主訴は頻尿と排便困難。直腸診で前立腺の口側に壁外性の腫瘤を触知。血液検査で白血球、CRP が上昇し、血沈が亢進。

左水腎症があり、逆行性尿管造影で左尿管が骨盤内で狭窄。注腸で直腸 Rs 部が約 5 cm にわたり狭窄。CT、MRI で仙骨前面、膀胱の頭背側に直腸 Rs 部を取り囲む約 5 cm の腫瘤を認めた。

後腹膜腫瘍を疑い開腹したが、切除不能で生検施行。回腸人工肛門を造設し、左尿管内にカテーテルを留置。病理、臨床所見から特発性後腹膜線維症の診断でプレドニンを投与。1年後には腫瘤の縮小と、尿管及び直腸の狭窄の改善が認められた。

総胆管を含め消化管狭窄を伴った後腹膜線維症は自験例も含め23例しかなく、これまで本邦では上行結腸の1例のみであった。

ロイド G 10 ml あたりプレオマイシン 30 mg を含むゼリーを就寝前に内服させた。放射線治療を4例で併用し75%に腫瘍縮小効果を認め全例に症状改善を認めた。6例はプレオゼリーを単独投与し腫瘍縮小効果は認めなかったものの66.7%の症例に症状改善を認めた。重篤な有害事象は認められなかった。プレオゼリー療法は放射線治療効果を助長し狭窄が高度な進行食道癌症例に対し有効な治療法と思われた。また有効な抗癌療法のない症例の QOL の改善に有用な治療法と思われた。

2) Helicobacter pylori 除菌を施行した low-grade 胃 MALT リンパ腫 5 症例の検討

古川 浩一 (済生会新潟第二病院 消化器科)
原田 武・榎本 博幸 (厚生連村上総合病院 内科)
多田 則義・綱島 正勝 (新潟大学医学部 第一病理)
西倉 健 (新潟大学医学部 第一病理)

Helicobacter pylori (以下 HP) 除菌を施行した low-grade 胃 MALT リンパ腫 5 症例の検討した。男性 3 症例、女性 2 症例。平均年齢は 64.8 歳。5 症例とも胃体部に病変を認めた。除菌療法は、Lansoprazole (30 mg) + Clarithromycin (400 mg) + Amoxicillin (1500 mg) × 7 days を施行し、1 症例は Metronidazole (1000 mg) を加えた除菌療法を追加した。HP は、胃体中部大弯と幽門部大弯そして病変部より組織培養と病理学的所見にて判定。4 症例で除菌が成立し、4 症例に除菌後 MALT リンパ腫の消失を認めた。Ann Arbor stage II, Naqvi stage II の 1 症例は、除菌療法が奏効しなかった。4 症例に胃粘膜生検組織にて、免疫グロブリン κ-Light Chain 遺伝子再構成を認めた。low-grade 胃 MALT リンパ腫に対し、Helicobacter pylori 除菌療法は有効であるが、対象症例につき今後、さらに十分な検討の必要があると考えられた。

第68回新潟消化器病研究会

日 時 平成10年7月4日(土)
午後1時00分より
会 場 新潟ユニゾンプラザ
4階 大会議室

I. 一般演題

1) 進行食道癌に対するプレオゼリー療法の検討

秋山 修宏・船越 和博
須田 浩晃・兎澤 晴彦
加藤 俊幸・斉藤 征史 (県立がんセンター)
小越 和栄 (新潟病院内科)

進行食道癌に対するプレオゼリー療法につきその方法と成績につき報告した。プレオゼリーの投与方法はアル

3) Stage IVb 進行胃癌長期生存の1例

田中 典生・下田 聡
武田 信夫・佐藤 好信 (県立新発田病院)
伊藤 寛晃・青木 賢治 (外科)

大動脈周囲リンパ節は現行規約では第4群リンパ節で、その転移は、単独で Stage IVb と規定されており、予後はきわめて不良である。しかしながら、近年、拡大リンパ節郭清により長期生存した症例も散見されるように